

地域ニュース

ひまわり

宝

「地球の奇跡」子供たちに伝える

宇宙でも稀有な星である地球、そのすばらしさを伝えたい。造形作家の新宮晋さん(83)はそんな願いを込め、風や水、引力といった自然エネルギーで動く立体作品を世界中で作ってきた。その思いを深化させたプロジェクトが今、新宮さんの地元・三田市で進んでいる。県立有馬富士公園の一面にアトリエや展示施設、劇場、カフェなど7棟を備えた芸術・文化体験型施設「地球アトリエ」を整備する計画で、令和5年の開設を目指すしている。

施設のコンセプトは「さまざまな分野で活躍するアーティストや科学者、文学者らとともに地球の未来を考え、環境問題など政治や経済の力だけでは解決できない問題をアートで克服し、発信していく」。特に子供たちには、自然の中でアートの楽しさを学んでほしい、と期待を寄せる。

幼いころから、親戚にあたる小磯良平画伯に絵画の教えを受け、20代をイタリア・ローマで過ごした。抽象画家として芸術家人生のスタートを切ったが、「おもしろい形が頭に浮かんでも、平面の四角いキャンバスには収まり切らない。ならば閉じ込めずに立体で拾い出したらい」と空間アートに目覚めた。

さらに、木にぶら下げた立体作品を写真で撮影しようとしたとき、風で動いて思うように撮影できないことに好奇心を抱き、「自然の力で動く仕掛けの面白さ」



県立有馬富士公園「新宮晋 風のミュージアム」にある新宮さんの作品「風のロンド」(本人提供)

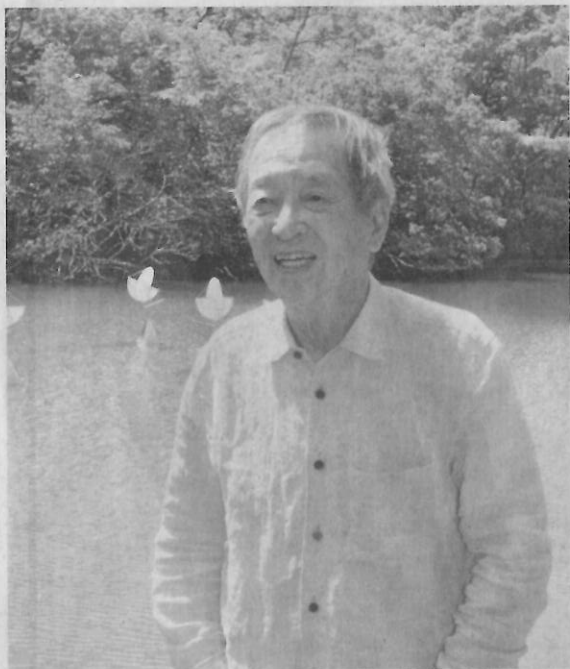
「地球の歴史の中では新参者の人間が、今や地球を支配し破壊しようとしている。アートや絵本に触れた子供たちが、かけがえのない地球を大切に思う大人に育ってくればうれしい」(古野英明)

29歳で帰国し、昭和45年に開かれた大阪万博で立体作品を展示以降、「奇跡の星・地球」という壮大なスケールの作品は世界の注目を集め続けた。

新宮さんには絵本作家という、もう一つの顔がある。地球の未来を託す子供たちに自身の思いを分かりやすく伝えるには、絵本が入りやすいと考え、同50年に初の絵本「いちご」(文化出版局)を出した。一口で食べられる小さなイチゴが厳しくも慈しみ深い大自然の中で成長していく姿を描いた作品。同作を含め、これまでに出版した13冊はいずれもアート作品としての評価も高く、翻訳されて世界各国で愛読されている。

このほか、三田市の「さんだ夢大使」を務めている関係で、子供向けの冒険物語「サンダリーノ」を市の広報誌で連載。宇宙からやって来たサンダリーノと三田の子供が冒険をしながら自然について学んでいく物語で、サンダリーノは「地球アトリエ」の劇場でもシンボルキャラクターとして人形劇に登場するという。

造形作家 新宮 晋さん(83)



しんぐう・すすむ 昭和12年、大阪府生まれ。東京芸術大卒業後、イタリアに留学し、立体アートに目覚める。大阪万博に作品を出展したのをはじめ、世界各地に風や水など自然の力で動く立体アートをつくり、世界的評価を受けている。平成3年、三田市にアトリエと自宅を構えた。